

富山県魚津市
佐伯遺跡
—県道拡張に伴う緊急調査報告—

1981

魚津市教育委員会

はじめに

魚津市は、県下でも著名な桜井遺跡（押型文土器）、天神山遺跡（天神山式土器）、大光寺遺跡（火焰土器）等が知られております。

このたび県道魚津一堀江線の拡張工事に伴う佐伯遺跡の一部が含まれていることがわかり、それにさきだち発掘調査を実施したものです。調査の結果、縄文時代～平安時代等の遺物が多く発見されました。その成果が本書であります。本報告書を通じて、埋蔵文化財に対する理解と今後の研究の一助となれば幸いです。

終りに本調査に参加された調査員はもとより、地元の方々、多大の御協力と御指導を賜った関係各位に対し、重ねて謝意を表します。

1981年2月

魚津市教育委員会

例　　言

1. 本書は県道魚津一堀江線の拡張に伴って実施した富山県魚津市佐伯遺跡の発掘調査報告書である。

2. この調査は魚津市本事務所から委託を受けて、魚津市教育委員会が昭和54年5月16日から同年6月24日までおこなったもので、その調査費用は魚津市本事務所の負担による。

3. 調査主体は魚津市教育委員会（教育長堀川寅治）であり、事務は社会教育課主事加藤寛が担当し、社会教育課長佐々田武義が総括した。

4. 発掘調査は社会教育課主事麻柄一志が担当し、富山県埋蔵文化財センター山木正敏氏の指導を受けた。

調査にあたっては、魚津市弥源寺地区、慶野地区、出地区の住民の協力を得ている。

5. 遺物整理及び本書の作成は麻柄がおこない、社会教育課斎藤隆、安念幹倫、同志社大学考古学研究室加藤幸子、石川直章、新潟大学考古学研究室川知明の協力を得た。清書は松島里美さんの手をわざらわした。

本文の執筆は、第Ⅴ章第5項「奈良・平安時代の上器」のうち須恵器を安念が、その他は麻柄が担当した。

I 位置と環境

魚津市は富山平野の北東部に位置する。南は早月川を挟んで滑川市と接し、北は布施川を黒部市との境としている。大河川が多く、海に面しているわりには沖積平野が少なく、海岸線からほぼ1kmで洪積台地となっている。沖積地が少ないため、近世以後の洪積地の開発は盛んで、緩やかな台地は現在ではほとんど水田と化している。

この広大な台地は、市内を流れる角川と片貝川によって3分割されている。遺跡の所在する中島地区は、早月川と角川に挟まれた細長い洪積台地と沖積平野から成っており、洪積台地を上中島、沖積平野を下中島と呼んでいる。

佐伯遺跡は角川によって形成された崖線上の沖積平野との接点に近い洪積台地上に位置する。海拔は約20~25mである。

この台地上には、南から升方遺跡、早月上野遺跡、吉野遺跡、山下Ⅱ遺跡（第1図3）、山下遺跡（第1図2）、佐伯遺跡（第1図1）と遺跡が南北にならぶ。

升方遺跡は縄文中期の遺物が採集されている。早月上野遺跡は魚津市では唯一の後期旧石器時代の石器が、検出されており、縄文中期・晚期の遺物も出土している。また、古代から中世の遺



第1図 地形と周辺の遺跡 (1 / 50000) 1. 佐伯遺跡 2. 山下遺跡 3. 山下一号遺跡 4. 早月上野遺跡
5. 吉野遺跡

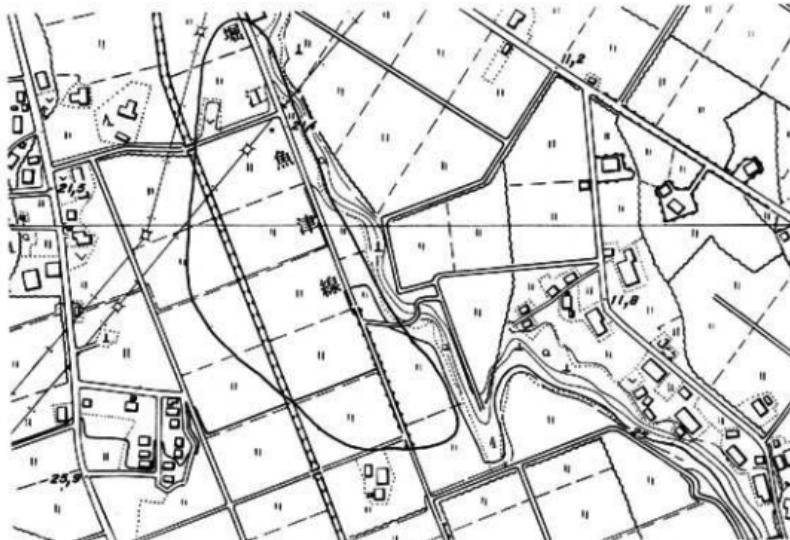
物・遺構もみつかっている。吉野遺跡からは、縄文中期、山下Ⅱ・山下遺跡からは、縄文前期の遺物が出土している。山下遺跡は佐伯遺跡の南東に隣接しているが、付近一帯の試掘調査でこの2つの遺跡は連続していることがわかっている。

なお、角川の対岸の野方台地の段丘崖上にも多数の縄文遺跡が分布している。火焰土器の出土で著名な大光寺遺跡なども、この遺跡群の中に所在する。

佐伯地内には旧家佐伯家がある。古くから佐伯村はこの佐伯家一軒のみであり、現在でもそのままである。佐伯家の伝書によれば、「四條大納言佐伯有若の子孫にて、文武天皇の御世大宝元年二月、有若越中国司と成、其嫡男有頼と俱に新川郡保の伏山に居館す。有頼後出家し名を慈興と改め、立山を開基す。有頼の嫡男太郎有直以来、布施郷を領地とし布施郷犬山に居館す。然るに松倉の城主椎名肥前守泰胤と翠の所縁がある故に、布施の郷と吉野の里と互に替地し、延文三年六月吉野に館を移し住す。……」(『越中史徵』による)と延文三年(1358年)に移住していることを記している。

江戸末期に記された『越中史徵』で森田柿園は景行紀、姓氏錄佐伯直の條を引き、「されば北越中なる斎木村の地も、いにしへ佐伯部の居たる故に、地名とは成たりけむ」と論じている。

ただし、現在までの研究では佐伯家について不明な点が多く、だだちに佐伯家と佐伯遺跡を結びつけることはできない。



第2図 遺跡の範囲 (1 / 5000)

II 調査の経過

1. 調査に至るまで

富山県内では分布調査の比較的進んでいた魚津市であるが、佐伯遺跡の発見は1976年のことである。1971年に発見された山下遺跡・帯に圃場整備事業の計画が持ち上がり、1976年、圃場整備事業実施に先立ち、魚津市教育委員会の手により、山下遺跡・帯の試掘調査がおこなわれた。この際、新たに山下遺跡に隣接して発見されたのが佐伯遺跡である。

この時の調査は、魚津市文化財調査委員広田寿三郎・大谷清瑞尚氏を調査員に委嘱し、1976年10月13日から10月31日までおこなわれた。この際に佐伯遺跡とともに、山下遺跡の南方約300mに山下II遺跡も発見された。この調査結果をもとに、1977年度におこなわれた圃場整備では一部工事の設計変更をおこない、遺跡の保存につとめた。

その後、圃場整備事業とそれに伴う排水路改修工事が、佐伯遺跡の中心部にまで進行しつつあり、遺跡の範囲、内容等を調査し、工事計画との調整を図り遺跡の保存措置を講ずる目的で1977年11月7日に、県教育委員会文化課山本正教・松本幸治の2名を調査員とし、魚津市教育委員会の手によって試掘調査がおこなわれた。この調査は、排水路予定地とその西側の水面において、10m~30mの間隔で1m×1mの試掘区を設けて遺物出土層及び地山（黄褐色粘土層・砂礫層）まで掘り下げ、弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代の出土をみた。遺跡の範囲は非常に広く、南北約300m、東西約50~150mを計ることがわかり、1978年度の工事に係る部分については、再度予備調査を実施する必要が生じた。

翌1978年7月26日から8月1日まで、富山県埋蔵文化財センターにより、試掘調査がおこなわれた。その調査結果をもとに、関係者の話し合いがおこなわれ、遺跡は盛土して水田下に保存されることになった（山本他 1979）。

また、この試掘調査に並行して、排水路入川改修工事に先立つ記録保存を目的とした緊急発掘調査が、6月7日から12月14日まで、富山県埋蔵文化財センターによっておこなわれた（橋本他 1979）。この調査により、佐伯遺跡は縄文時代早期から近世まで複合遺跡であることがわかり、弥生時代末~古墳時代初頭の竪穴住居跡が1棟、平安時代の掘立柱建物26棟が検出されるなど、きわめて貴重な遺跡ということが判明した。

なお、1978年度の発掘調査がおこなわれる直前に、県道魚津一堀江線の拡張工事が佐伯遺跡の範囲内においてもおこなわれたことがわかった。この時、既に県道は遺跡の北側において、東西両側、その他は東側の拡張工事が終了しており、何の保護措置も講ぜられることなく破壊されてしまった。県教育委員会では未着工の県道西側の事前調査をおこなうよう県上木部・魚津土木事務所に要請したが、調査員の不足等で越年することとなった。翌1979年4月、富山県埋蔵文化財



第3図 発掘位置 (1 / 200)

センターでは、佐伯遺跡県道拡張部の調査を魚津市教育委員会に依頼し、魚津市教育委員会が調査主体となり発掘調査をおこなうこととなった。

魚津土木事務所との協議により、調査は5月中旬から6月下旬までとし、遺物整理、報告書作成は55年1月以後おこなうことになった。

2. 過去の調査について

佐伯遺跡は昭和51年度から53年度に渡る3ヶ年の調査が実施されている。これらの調査で、縄文時代から近世までの複合遺跡であることが明らかになっている（橋本正他 1979、山本他 1979）。

・縄文時代

遺物量は全体に少ないが、早期から晩期までの遺物が出土している。土器では、早期の押型文土器、前期末の福浦下層式に比定できるもの、中期の半截竹管文を施したもの、後期中葉の磨消縄文土器、晩期初頭の土器片がみられる。

石器では、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錘、スクレイバーなどが出土している。石器の所属時期は不明である。その他に上偶が出土している。

・弥生・古墳時代

弥生・古墳時代では、遺物は土器のみである。弥生時代中期では、東日本に分布の中心をもつ、天王山式土器と、畿内系の櫛描文土器が検出されている。いずれも小破片である。

弥生時代末から古墳時代初頭の遺物は量的にはまとまっている。器種では、壺、甕、高杯、器台、蓋、鉢がある。造構としては、6本主柱の竪穴住居址が1棟発見されている。

・奈良・平安時代

土器は、土師器の杯、甕、鍋、須恵器の杯、蓋、壺、甕、瓶がある。また、土錘、硯もみられる。時期的には、8世紀末から10世紀におよび、主体を占めるものは9世紀とされている。

造構としては、26棟におよぶ掘立柱建物と1棟の竪穴住居址がある。そのほか性格不明の土坑69基、溝などもある。掘立柱建物はいずれも小規模で、3間×2間のものが7割近くを占める。

3. 調査の方法

発掘調査に着手した段階において、県道は既に東側において拡張工事が終了しており、西側においても圃場整備に伴う側溝の施工がおこなわれていた。このため調査可能な範囲は西側の側溝からとの県道の間の幅2~2.5mに限られた。

調査区の設定は、拡張工事の終了している北部を起点とし、10m単位でI区、II区、III区……と南へトレンチをのばし、I区内をさらに2m単位で、I-1区、I-2区、I-3区……I-5区と区切った。この方法で南へ順次設定したトレンチはXIX区まで及び、つまり190mの長さを発掘したこ

となる。

調査は、初日から2日間、一層ごとに手掘りで遺構面の検出をおこないながら調査を進めたが、遺構の検出は3層上面まで掘り下げた段階でようやく可能になった。そこで、3日目からは、3層上面ないしは4層上面まで掘り下げてから遺構の検出をおこなった。

遺構のない地点では一部山石器時代の遺物の発見のため、地山面（3層より下）を約30~50cm掘り下げた。しかし、遺物は発見されなかった。

なお、調査終了後、遺構には掘り上げた第二層の黒褐色土を被せ、工事の際の遺構の破壊を防いだ。

III 層序と遺構

1. 層序

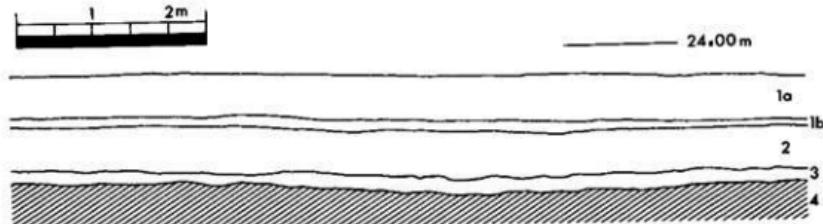
表土から地山（赤褐色粘土層）までは、1区で約30cmと比較的浅いが、XIX区では1mを越えた。発掘範囲内では、地山面のゆるやかな傾斜に較べて、表土の傾斜の方がやや急である。層序は第4図のとおりである。

- 1 a層…………耕作土、暗褐色土層でやや砂質
- 1 b層…………床土、褐色土層でやや粘質
- 2 層…………黒褐色土層、やや粘質、遺物包含層
- 3 層…………灰褐色粘土層（漸移層）
- 4 層…………赤褐色粘土層（地山）

なお、2層は一部でさらに細分できる。

1層からは、土師器・須恵器・越中瀬戸焼、2層からは、縄文土器・石器・弥生土器・須恵器・土師器・白磁が出土。3・4層は無遺物層。

佐伯遺跡の層序は、同じ台地上の早月上野遺跡の層序（岸本他 1976）と基本的には同じで、佐伯遺跡の1a層が早月上野遺跡のⅡ層に、2層がⅢ層に、3層がⅣ層にそれぞれ対応する。佐伯



第4図 Ⅹ区西壁の層序

遺跡の層序は、佐伯遺跡の位置する中島台地の基本層序を示しているものといえよう。

2. 遺構

遺構としては、整穴住居址、土坑、掘立柱建物の柱穴、焼土がある。

整穴住居址は第IX区・X区において1棟検出されている。地山面まで掘り下げた段階で、二重周溝を確認し、住居址と判明した。住居址の周辺は変形が著しく、第3層の漸移層がみられない。床面はやや堅く、踏み固められた形跡がある。床面は周囲より約20cm低い。

住居址の大きさは、推定で、径約11mの円形で、内側の周溝内だけでも径約8.5mを測る。柱穴は発掘区内では2本のみと認められ、推定復元では5本と考えられる。柱穴は直径約50~60cmで、深さは、中央のものが、床面から約30cm、壁に一部かかっているものが、床面から約20cmである。周溝は二重であるが、南部の外側周溝は擾乱を受けて、形状はかなり変形している。周溝の深さは、外側のもので約20cm、内側のもので約10cmと浅い。外側周溝内には、直方体型の長さ約15cmの礫が並んでいる。内側の周溝にはこのような礫はみられない。

遺物は、外側周溝内より、高杯（第12図3）が出土している。また、住居址覆土からは、蓋、高杯、甕が出土している（第11図2・7、第12図1・10）。いずれも弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけてのものであろう。

土坑は、遺物が出土しているものが5基、遺物の出土がみられないもの10基で、計15基を数える。

SK-01は、径約1.5m、深さ約20cmで、中からは平安時代の土師器壺の胴部破片が2個体分出土している。壺にはいずれもススが付着している。

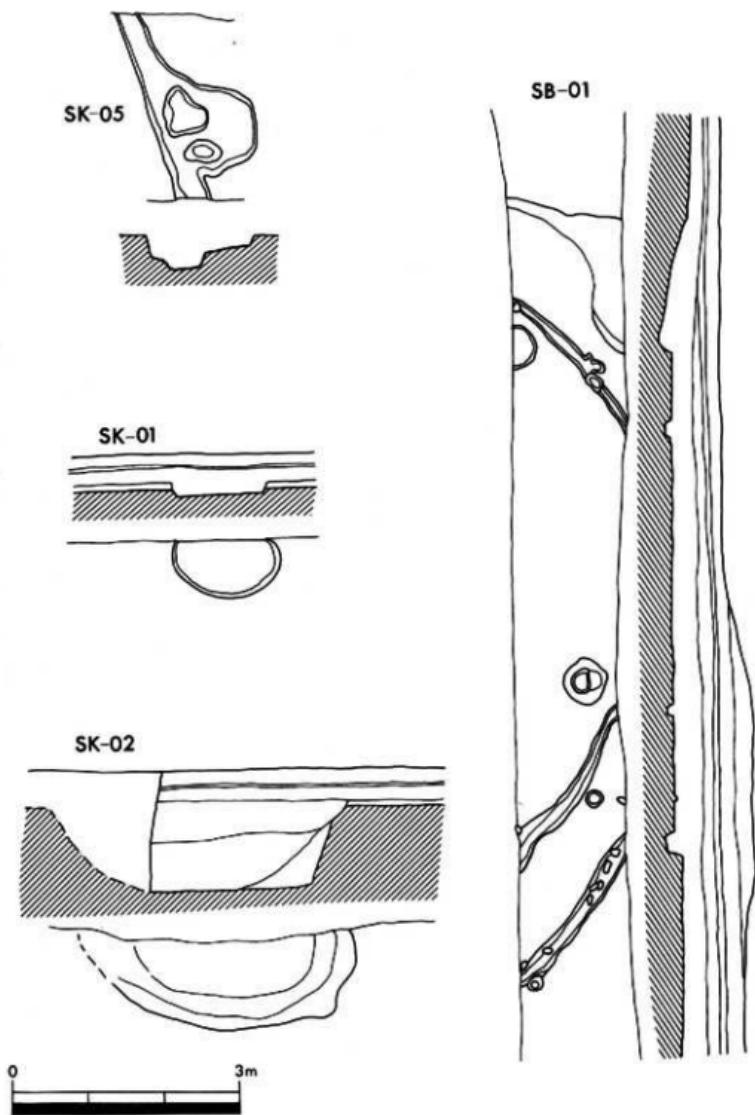
SK-02は圃場整備の際におこなわれた農業用水の改修工事で、約3分の1が破壊されている。推定で、径は約380cm、深さ120cmを測る。覆土は3層に細分され、最上層からは須恵器杯（第15図10）が、最上層および中層からは弥生土器（第11図1・15）が出土している。下層からは出土遺物はみられない。

SK-03は、径約80cm、深さ約40cmと小型のもので、須恵器大甕が出土している（第18図）。そのほか、須恵器、土師器の小破片が出土している。

SK-04は、径約80cm、深さ約50cmで、掘鉢形を呈している。弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器片が出土している。また、この土坑からは、掌人の礫が数点底部から出土している。

SK-05は、箱型の土坑に溝状の遺構が付随している。深さは中心部で約50cmを測る。遺物は、長頸壺（第11図3）が1点のみ出土している。

掘立柱建物は、実際はかなりの数にのぼると予想されるが、トレチの幅が2~2.5mと狭いため、柱穴から掘立柱建物を復元するのは困難である。数多く発見されている柱穴様の小遺構は、その多くが掘立柱建物の柱穴であると考えられる。出土遺物や、1978年の調査の成果を参考にすれば、掘立柱建物は、奈良・平安時代に属し、大部分は平安時代のものであろう。



第5図 造構図

IV 遺 物

1. 石器（第6～8図）

石器は総数で6点出土している。いずれも包含層からの出土で、遺構からのものはない。石器の所属時期は第6図1～5は縄文時代のものと考えられるが、6については不明である。

1は硬質砂岩で、小形の打製石斧の未製品。片面には自然面を多く残しており、分厚い剥片を素材としていることが推定できる。主要剝離面は残っておらず、粗い二次加工が周囲から全面に施工されている。最大長10.1cm、最大幅6.6cm、最大厚3.1cm。V-2区の2層より出土。

2は鉄石英のスクレイパー。縦長の剥片を素材としており、片側辺にはナイフ形石器の刃溝し加工に類似する二次加工がなされている。もう一方の側辺部には、主要剝離面側から細かな二次加工が施されている。上主要剝離面・背面いずれの面も、剝離方向が石理に対して逆目になっていているため、小さく波打っている。先端部は古く欠損している。最大長4.0cm、最大幅2.9cm、最大厚0.9cm。IV-1区表土層より出土。

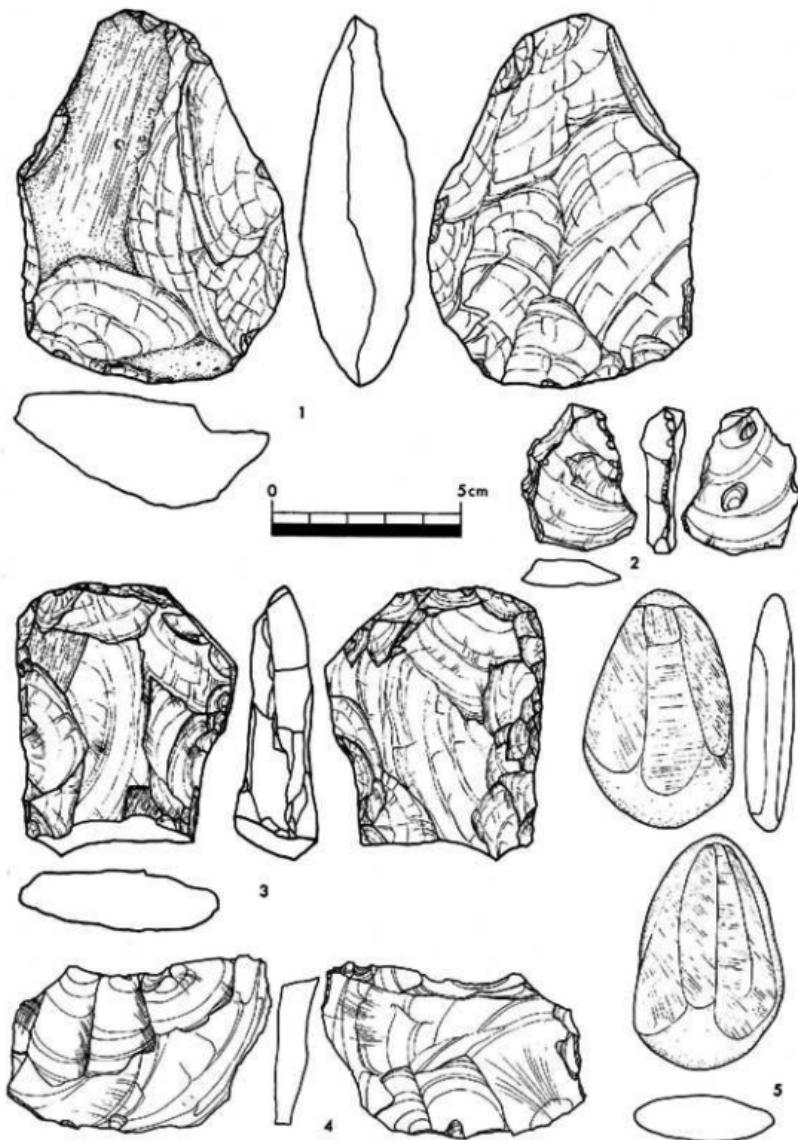
3は粘板岩を用いた打製石斧。下半部は欠損している。形態は撥形であったと想定される。片面の一部には摺理面がみられる。この石斧の製作にあたっては、まず摺理面にそって粗削りをおこない、整形も石理に順目になるよう丁寧になされている。くびれ部においては横断面は凸レンズ形を呈するが、頭部では台形となっており、素材の形状はあまり変形されていない。最大長（現存部）7.3cm、最大幅5.9cm、最大厚2.2cm。XI-3区2層より出土。

4は鉄石英の石核。大形の剥片の2側辺を折り取り、折り取り面を打面として、主要剝離面側に3枚、背面側に2枚の剥片を得ている。剝離された剥片は、2×2cmから2×3cmほどの小形のものである。最大長6.9cm、最大幅4.3cm、最大厚1.0cm。III-2区2層より出土。

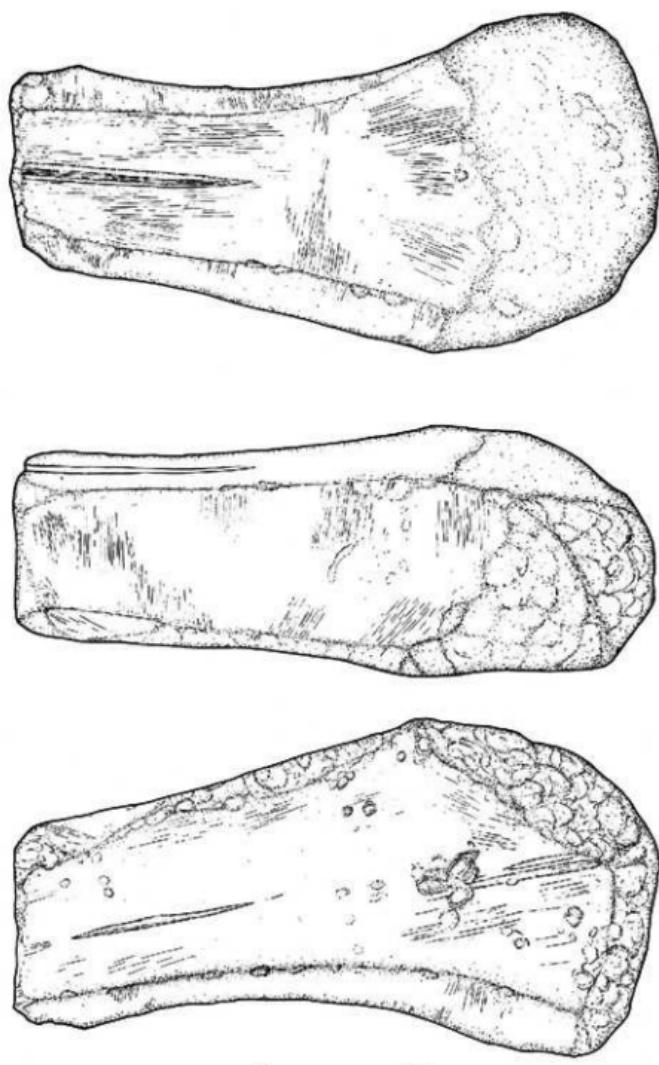
5は扁平な蛇紋岩の両面を研磨した石器。小形の磨製石斧の未製品であろうか。磨製石斧の未製品であるとすれば、製品の形狀に近い礫を素材として選択しているといえる。最大長6.4cm、幅3.9cm、最大厚1.1cm。VI-2区表土層より出土。

第7図は砂岩製の砥石。最大長22.8cm、最大幅11.2cm、最大厚8.1cmを測る。4面が使用された角柱状であり、そのうち2面の中央部には浅い溝が作られている。擦痕は、溝のあるやや広い面では溝と平行に、その両側面では、溝と直交する方向につけられている。使用の度合は、溝のある面の方が著しい。VI-3区2層より出土。この砥石の所属時期は不明であるが、金属器の出現以後のものであろうか。

第8図は、佐伯遺跡から山下遺跡の一帯で、魚津市立西部中学校の生徒によって表面採集されたものである。採集者、採集地点、採集年月日等は不明である。現在は魚津市教育委員会において保管されている。

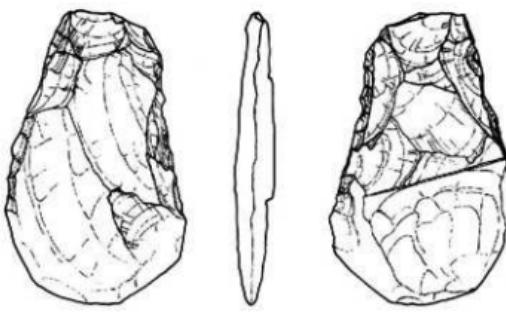


第6図 石器

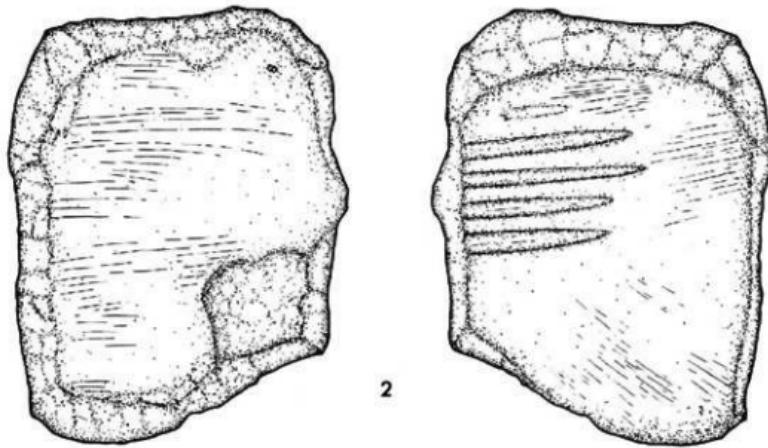


0 5cm

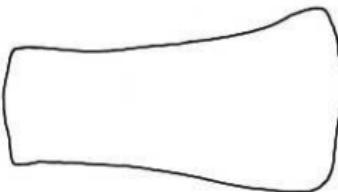
第7図 石器



1



2



第8図 石器（表面採集）

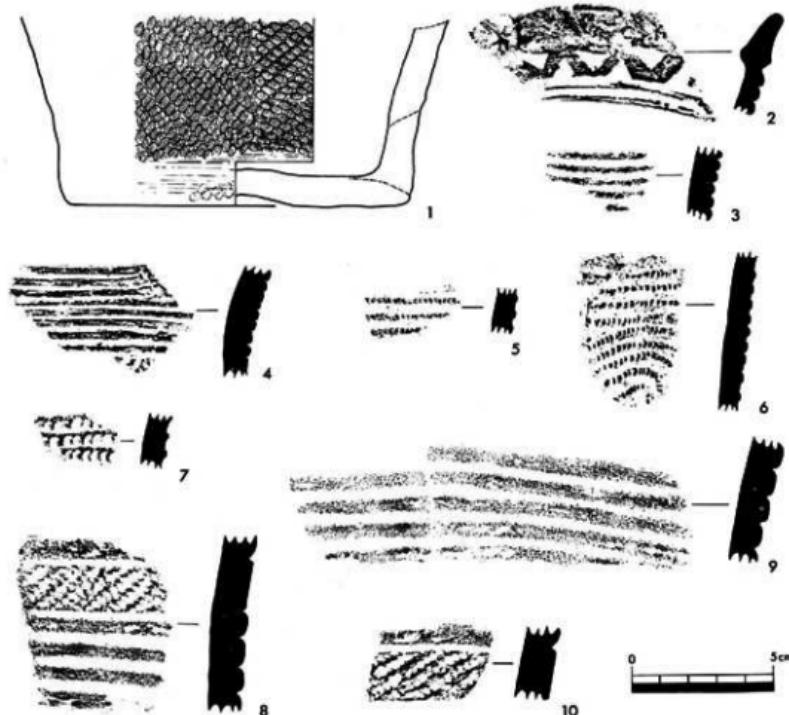
1は粘板岩製の打製石斧。先端部は使用のためか、かなりの摩滅が観察される。片面は主要剥離面を残しており、素材は摺理面にそって薄く剥がされた剝片であることがわかる。側辺部は丁寧な調整が施されている。長さ7.8cm、幅4.7cm、厚さ1.0cm。

2は砂岩製の砥石。二辺で折断されている。片面には5本の溝が認められる。形状は中央部が凹み、石皿状を呈していたようだ。擦痕の方向は表裏両面とも同一方向である。

なお、この2点の石器とともに、魚津市立西部中学校の生徒によって採集されている土器はすべて縄文時代前期後葉のものである。

2. 縄文土器

佐伯遺跡から出土した縄文土器は総数が30点あまりにすぎない。前期に位置づけられる土器（第9図1～7）が多数を占めるが、中期のもの（第9図8～10）もある。



第9図 縄文土器

1は2つの縄文原体を用い、羽状に縄文を施している。土器の製作にあたっては、底部となる円板を作り、円板の胴部との接合部に条痕を施し、接合しやすくしている。2～6は、前期後葉に位置づけられている福浦下層式に比定できる一群である。2は口縁部に三角形の印刻が施され、胴部は細い半載竹管による半隆起線文によって飾られる。3・4は2とは別個体であるが、2と同じ類型の胴部文様である。5・6は浮隆爪形文。7は爪形文。この他に粘土紐貼付の土器がある。

8～10は同一個体に属する。太い半載竹管文が施されている。中期のもので径は50cm以上の大形になると推定される。

このほかに、魚津市立西部中学校生徒の採集品があるが、動物意匠の象形的な把手をはじめ縄文時代前期後葉のものがほとんどである。

3. 弥生土器

今回の調査で出土した弥生土器はわずか18点にすぎない。いずれも上野章氏によって天王山式土器と認定されたものに相当する（上野 1974、橋本他 1979）。出土地点はほとんどが、IX-2区からである。

沈線による有文部5点、縄文部13点であるが、沈線文を持つものもすべて地文に縄文が施されている。土には石英などの砂粒を多く含む。



第10図 弥生土器

1は鉢形土器で、細かい縄文を地文とし、ナデで縄文を一部削り消した上に、深い沈線文が施されている。色調は暗褐色で焼成は良い。器面にはススが付着している。

2は壺形土器の頸部であろう。地文には細かい縄文が斜めに施されている。沈線は2本で1単位となっており、上が深く、下は浅く、かすかに見えるだけである。先端部が2段に分れた工具を用いている。外面は赤く塗られており、内面にもその痕跡が認められる。この土器は1977年の試掘の際に出土したものである。

3～8は器種の認定が困難である。ススの付着がみられるものが多く、変形土器が大部分であろう。3は、現存部だけで二重の連弧文と2本の直線的な沈線で飾られている。直線は長さ3cmほどづつ区切って施文されている。これは4も同じである。4は、連弧文が3とは逆向きとなっている。連弧文は、連続して描かれているのではなく、ひと山づつ区切って右から左へ沈線が施されている。5は、全体が摩滅しているが、地文に縄文が使われている。沈線は浅い。

6～8は縄文のみのものである。6の縄文は縱走するが、7・8はやや斜行する。8は底部に近い。縄文土器と区別しにくいが、縄文紋が細いのと、出土区がいずれもIX-2区からであるので、弥生土器に含めた。図示しなかった縄文のみの土器もすべて同様な理由で弥生土器とした。

4. 弥生時代終末から古墳時代初頭の土器

ここでは、後期終末の弥生土器と、古式土師器を一括して扱う。前年度の調査においてもこの時期の遺物が大量に出土しており、それを整理した池野正男氏によれば、大部分が、弥生土器で一部古式土師器が含まれるとしている（橋本他 1979）。復元実測可能なものはすべて図示した。総数で26点である。

● 壺形土器（第11図1～3）

1はSK-02より出土。胴部との接合部で割れている。口縁部はナデで調整をおこない、頸部は、最上部にハケ目が、その他は細かなヘラ磨きが施されている。胎土はキメ細かい。色調は淡黄褐色を呈する。

2は、暗褐色の色調を示し、焼成は良。口縁部には、先の丸い棒状工具による刻突文が施されている。調整は口縁部ではナデで頸部は粗いヘラ磨きをおこなう。頸部と胴部の接合部で割れており、その接合部ではハケ目がみられる。胎土には0.5～2mmの石英粒を多く含む。住居址覆土より出土。

3はSK-05より出土。色調は赤褐色で、焼成は不良。器壁はきわめて薄く、内外面ともに、ハケ目で調整が施されている。

● 変形土器（第11図4～8）

4～7の口縁部は内外面ともハケ目の調整が認められる。6・7はハケ目に使用したと考えられる板によって浅い刻み目が施されている。5の胴部は粗いヘラ削りによる。8は同一個体に属



第11図 弥生時代末～古墳時代初頭の土器

すると考えられる。口径は、15cm、底部直径は4.2cm、器高は推定で18~20cmと考えられる。器厚はきわめて薄く、胸部で3mmほどである。口縁部には、4条の凹線状平行沈線文を回らしている。腹部外面は、ハケ目が、内面はヘラ削りがみられる。尚、底面にもハケ目が施されている。

● 底部 (第11図 9~15)

10・11は、外面ハケ目、内面はヘラ削り。9・15は内面ヘラ磨き。いずれも、彫形土器、壺形土器の底部であるが、分類はできない。

● 壺 (第12図 1~11)

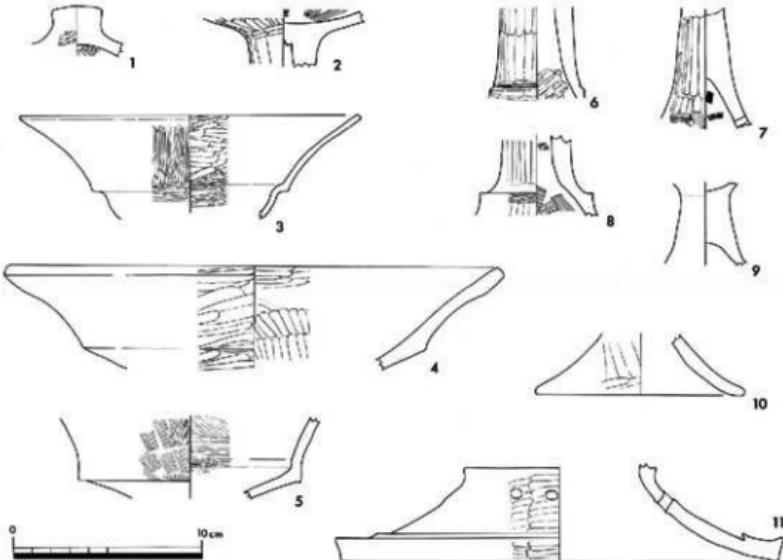
1点のみ出土。SK-01の覆土より出土。内外ともヘラ磨きで調整された上赤く塗られている。蓋は前年度の調査でも数点出土している。

● 高杯 (第12図 2~11)

3は、SB-01、外側周溝内より出土。内外面ともに赤く塗られている。調整は丁寧なヘラ磨きによる。

10はSB-01より出土。2~4・6~11は外面はヘラ磨き、5は内外ともにハケ目がみられる。6~8の内面にはカキ目が観察できる。

杯部は3~5とともに底辺部と口辺部の接合部が屈折しており、特に3、5は明瞭な段を有する。脚部は、ラッパ状に開くもの(7・9・10)と、円筒状の脚上部と大きく広がる脚下部の接合したもの(6・8・11)の2種がある。



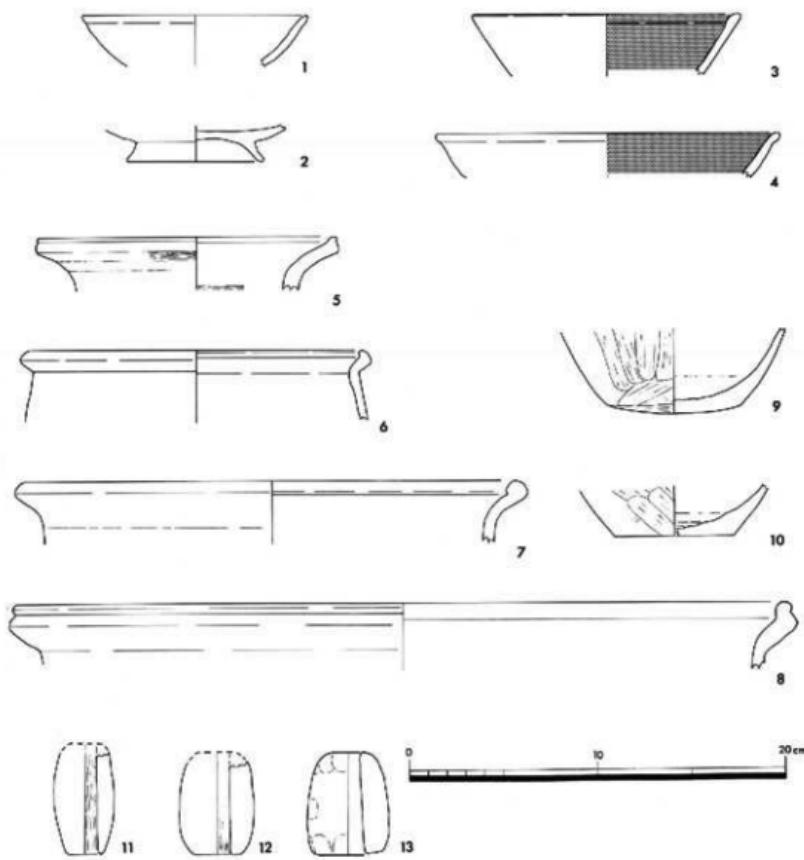
第12図 弥生時代末~古墳時代初頭の土器

5. 奈良・平安時代の土器

●土師器（第13・14図）

今回の調査で出土した土師器には、杯・甌・黒色土器がある。出土した土師器の量はかなり多いが、器形が復元できるものは少ない。土師器の成形はすべてロクロによる。

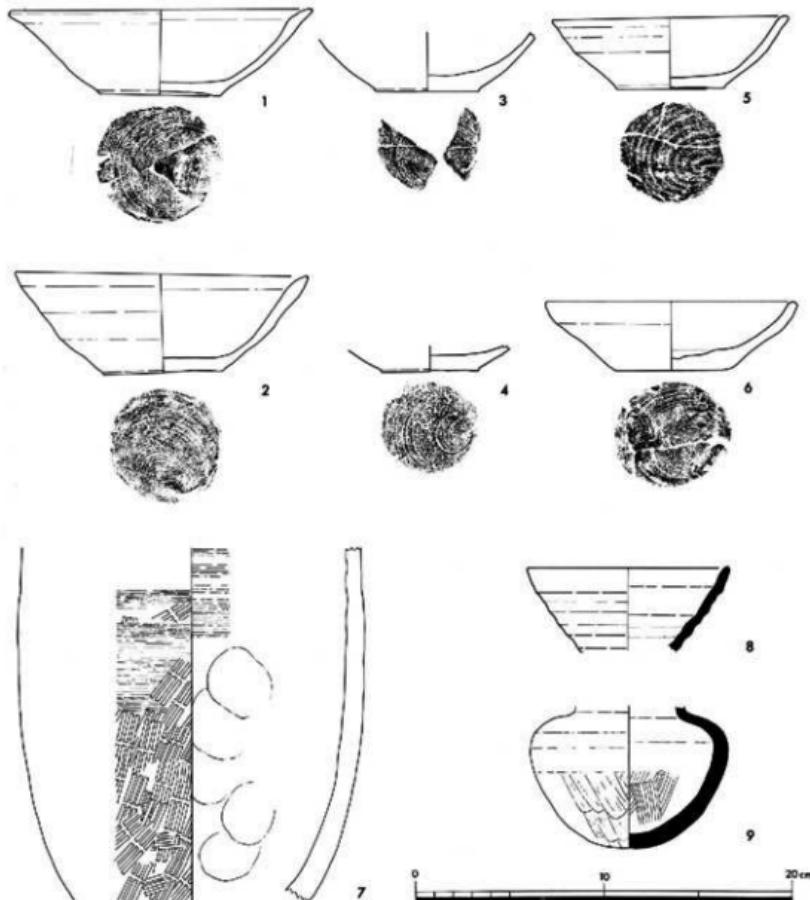
杯は口径が12~16cmで、大部分は糸切底である。高台付のものは、第13図2のみで、その他は高台が付かない。底部はやや上げ底で、糸切り痕はすべて同一形態となっている。整形は内外面ともにナデとなっている。



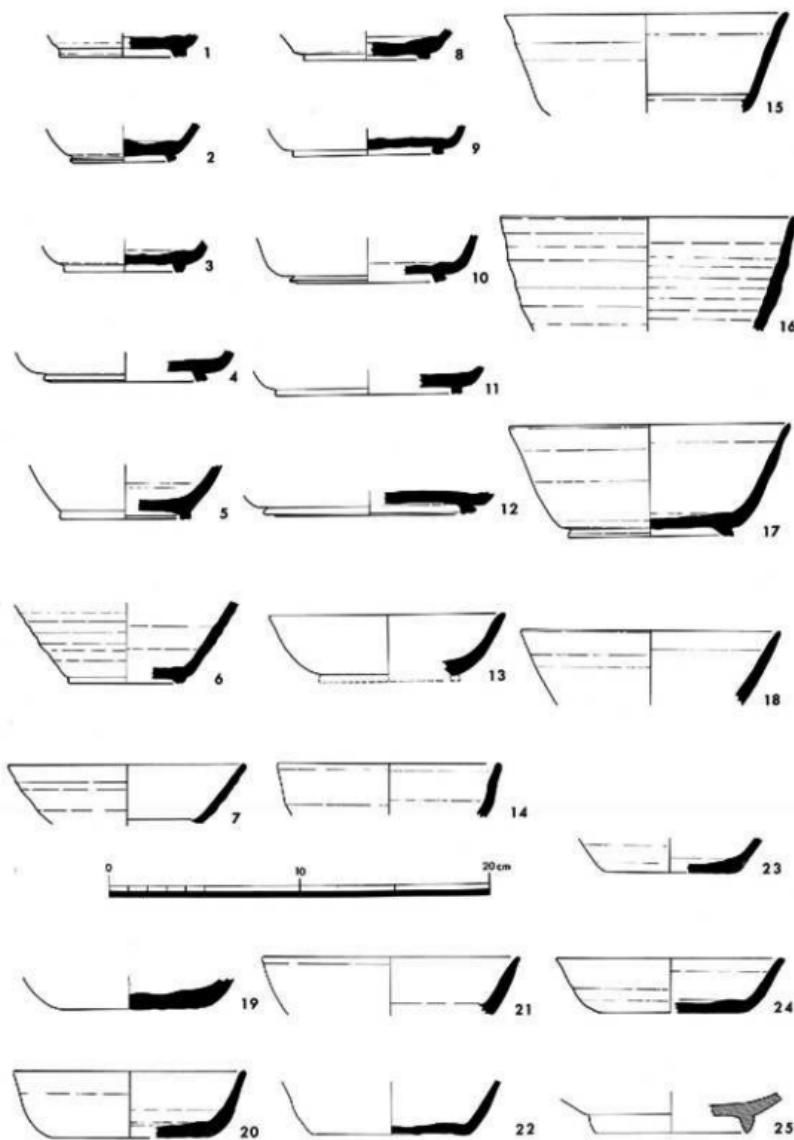
第13図 奈良・平安時代の土器（土師器）

甕は口径16~19cmのもの、25~30cmのもの、40cm以上のものの3種がある。器厚は胴部で5~6mmのものと、1cm前後のものがある。前者の底部は平底になるようである(第13図7~10)。後者の底部は丸底になると思われる。甕の整形は、胴上半部はハケ目もしくはロクロナデ、胴下半部はタタキ目もしくはヘラ削りとなっている。

黒色土器は、図示した2点のみである(第13図3・4)。内面のみが黒色に研磨されている。底部は不明である。



第14図 奈良・平安時代の土器 (VI-5区-括出土)



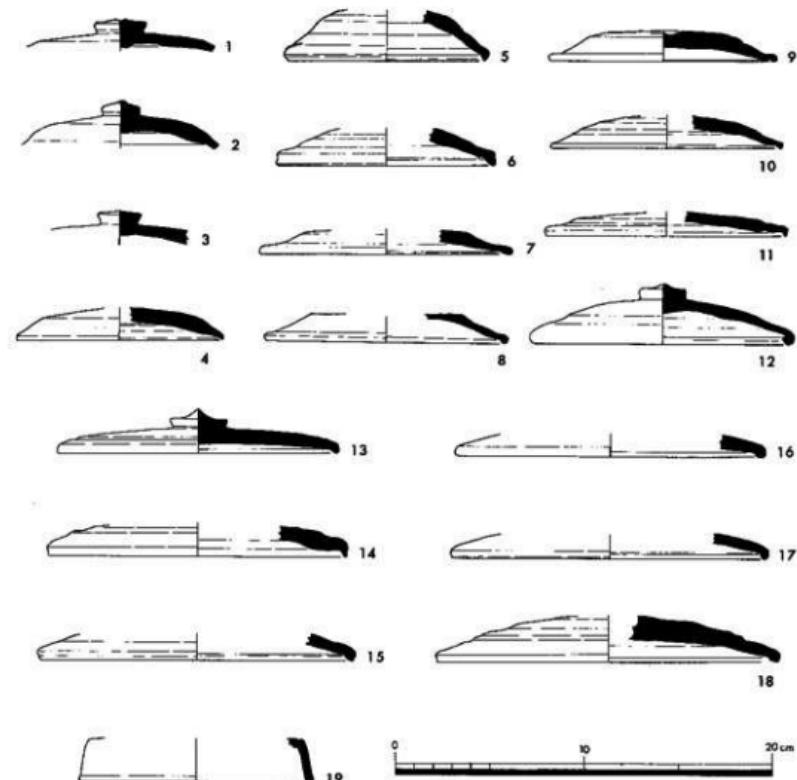
第15図 奈良・平安時代の土器（須恵器）

●須恵器（第15図～18図）

今回出土した須恵器は、少量かつ断片的な破片が多く同化するのに困難をきわめた。また、大半が包含層より出土したものであり、造構との関連を持つものはSK-02より出土した杯・甌の破片を見るだけである。器種としては、杯・杯蓋・甌蓋・甌・甌などがある。^{註1}

杯A（第15図19～24）やや平坦な底部と斜上にまっすぐのびた口縁部とからなる。大きさはⅠ径12cm前後、高さ 2.7～3.3cmの範囲に集中するものである。口縁部内外面および底部内面はロクロナデによって仕上げるが、底部外面はヘラ切りをおこなった後粗いナデによって仕上げている。そのためヘラ切り痕が見うけられるものもある。灰黄褐色（19・20・22）青灰色（21・23・24）で、硬質である。

杯B（第15図1～18）杯Aに高台をつけたものである。底部の直径からⅠ類（5.5～6.8cm）、Ⅱ



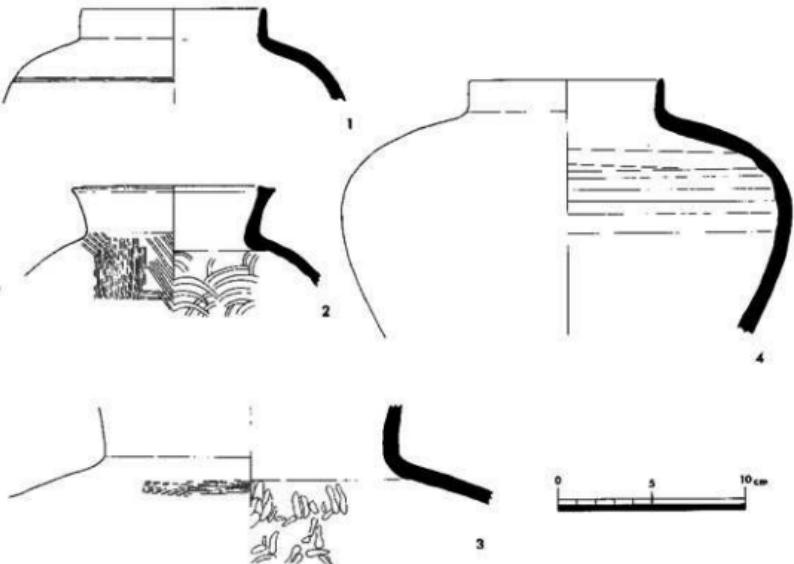
第16図 奈良・平安時代の土器（須恵器）

類（8～10cm）、Ⅲ類（11.3cm）に区別できる。口縁部内外面および底部内面はロクロナデによって仕上げる。底部外面には、ヘラ切りをおこなった後にナデによって仕上げるもの（2・3・9・12・17）、糸切りをおこなうもの（5・6）とがある。青灰色（3・4・9～12・16）灰青色（2・6～8・14・15・17・18）灰黄褐色（1・5・13）があり、硬質のものが大半を占める。10はSK-02より出土したものである。

杯B蓋（第16図1～18）杯Bの蓋である。頂部がなだらかに下るものと、丸く笠形を呈するものとがある。大半は扁平な宝珠つまみを持つと思われるが、残存しているものは数点だけである。直径は10～18cmまでと一樣ではない。縁端部では下方に折れまがるものと、丸めこむものとがあるが、明確には区別できない。頂部内面はロクロナデによって仕上げるが、頂部外側はヘラ削りをおこなった後、ナデによって仕上げる。9の頂部内面に墨痕が見られることや、中央部が非常になめらかなことから硯に使用されていた、つまり転用硯と考えられる。灰白色（1・5・6・11・16・19）青灰色（2・9・12～14）灰青色（10・15・17・18）などで大半が硬質である。

壹A蓋（第16図19）蓋Aの蓋である。平坦な頂部に垂直に下がる縁部からなる。縁部内外はロクロナデによって仕上げる。灰青色で硬質である。

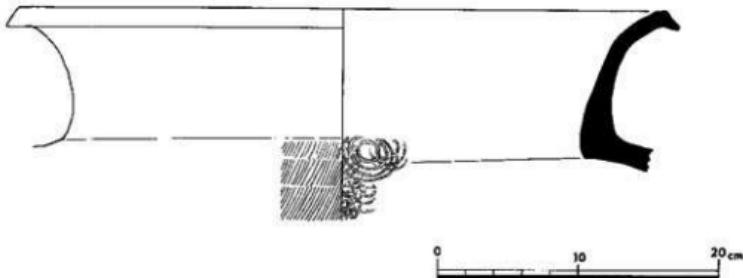
壹A（第17図1・4）上方へ垂直にのびる短い口縁部と卵型を呈した体部からなる。口縁部および体部内外面はロクロナデによって仕上げる。外面には釉が施されている。



第17図 奈良・平安時代の土器（須恵器）

型A（第17図2・3 第18図）2は体部外面に平行タタキ、内面に同心円文が施されている。3は体部外面に平行タタキをおこなった後、粗いナデによって仕上げる、内面では不定形なタタキが施されている。第18図のものは、SK-02より出土したものである。体部外面に平行タタキ、内面に同心円文が施されている。すべて青灰色で硬質である。

須恵器の破片が多く出土した中で、特殊なタタキが施されている人面の体部破片も出土した。外面は一般的な平行タタキに対し、内面では放射状文的なタタキがところ狭しと施されているものである。なお、このタタキ文は立山古窯跡群の法光寺谷2号窯（藤田1974）から出土した花状文的なタタキ文と類似している。



第18図 奈良・平安時代の土器

● VI-5区より出土の一括遺物（第14図）

VI-5区の第2層下部より土師器・須恵器の一括遺物が出土している（図版参照）。

土師器では、杯8個体分、甕1個体分、須恵器では杯、壺がそれぞれ1点ずつである。

土師器杯はいずれも糸切底のものである。須恵器杯は口縁部の立ち上がりなどからみて、杯B II類と同種のものと考えられる。杯B II類のなかでも第15図5・6に近い。第15図5・6はいずれも糸切底で、第14図8の杯も糸切底であった可能性が強い。壺は外面全体はナデによって仕上げるが、底部ではハラ削り痕が見られる。底部内部面でもハラ削り痕を停める。

この一括遺物は時期的には、土師器杯・須恵器杯などから平安時代前半のものであろうと推定している。

● その他の遺物

土師器・須恵器のほかに青磁（第15図25）、土錐（第13図11～13）がある。

青磁は平坦な底部と下方に垂直にいたる高台からなる。内外面はロクロナデによって仕上げる。底部内面には重ね焼き痕がある。

土錐は全部で3点出土している。いずれも土師質である。胴部径が4cm前後のものと3cm前後のものの2種がある。

V 調査のまとめ

今までの調査をふまえ、今回の調査を総括する。

●縄文時代

縄文時代では、早期、前期後葉、中期、後期中葉、晚期初頭の土器が出土している。今回の調査では、前期後葉の土器片と石器が少量出土している。各期の遺物もさほど多くなく、石器組成も不完全で、打製石斧、磨製石斧に若干の剥片石器で構成されている。縄文時代の造構は今のところ発見されていない。

土器の量が少なく、不完全な石器組成を持つ遺跡といえば、福光町・城端町にまたがって分布する立野ヶ原遺跡群によくみられる形態である。

魚津市内では、早月上野遺跡・大光寺遺跡・天神山遺跡といった大遺跡の存在は古くから知られていたにもかかわらず、小遺跡があまり注目されていなかった。佐伯遺跡のように、黒色土が厚く堆積しており、遺物の出土範囲もかぎられユニットは踏査などの発見は期待できない。

近年、北陸自動車道の建設に先立ち、路線内の埋蔵文化財の調査が進むにつれ、今までに発見されていなかった小遺跡が、洪積台地上に次々と発見されている。いずれも、狭い範囲内に少量の土器片と石皿を含まない少數の石器による遺物群である。

魚津市内の洪積台地上には、大遺跡と大遺跡の間に広がる空間に、佐伯遺跡で発掘されたような小遺跡が点在していると考えられる。

縄文時代前期後葉の遺跡としては、佐伯遺跡は市内では唯一のものである。県東部では立山町吉峰遺跡（柳井他 1975）滑川市安川古窯遺跡（小島他 1978）黒部市新坂遺跡（桜井 1979）などがある。

●弥生時代中期

今回の調査でも前回と同様に天王山式の土器片が出土している。前回の調査で出土した、天王山式土器と櫛描文土器の共伴関係は今回の調査でも確認されなかった。

●弥生時代終末～古墳時代初頭

今回検出された竪穴住居址は、佐伯遺跡では2例目である。前回発見された住居址から直線で約180mの距離にある。包含層からの土器の量もわりと多く、2棟の住居址のほかにも数棟の住居址の存在が予想される。この時期の集落は魚津市内では今のところ佐伯遺跡以外に知られていない。

●奈良・平安時代

佐伯遺跡の出土品の主体となるものは、この時代の遺跡である。前回の調査では26棟の掘立柱建物が復元されている。今回の調査ではトレーンチ幅が約2mと狭いため、柱穴は数多く発見されているが、復元できる建物はない。しかし前回の調査で発見された集落が、角川に面した崖際まで広がっていたことは確実である。

魚津市内では、奈良・平安時代の遺跡としては、早月上野遺跡・友道遺跡、犬王山遺跡等が知られている。

古墳時代において、魚津市は遺跡のほとんど発見されていない地区であるが、奈良・平安時代になると、低位段丘面、沖積平野に遺跡が出現する。魚津市近郊でも、入善町じょうべのま遺跡（橋本他 1975）黒部市新坂遺跡（桜井 1979）滑川市安田下水遺跡（金子 1979）が出現する。これは、県東部に共通してみられる現象であろう。^{注2}

註1 上器の器種名および調整手法は、奈良国立文化財研究所

『平城宮発掘調査報告書II～IX』に準拠した。

註2 1980年の発掘調査で印田遺跡から古墳時代中期の住居址が検出されている（斎藤他 1980）。

参考文献

- ウ 上野 章 1974 「高岡市頭川遺跡」「大境5号」
- カ 金子忠雄 1979 「安田下水遺跡」『滑川市史考古資料編』
- 岸本雅敏・山本正敏・酒井重洋 1976 「富山県魚津市早月上野遺跡第2次緊急発掘調査概報」 富山県教育委員会
- 小島俊彰・金子忠雄・松井幸雄・藤田富士夫 1978 「富山県滑川市安田古宮遺跡発掘報告書」 滑川市教育委員会
- サ 斎藤 隆・安念幹倫・麻柄一志 1980 「印田遺跡現地説明会資料」 魚津市教育委員会
- 桜井隆夫 1979 「北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第1集」 黒部市教育委員会
- ハ 橋本 正・岸本雅敏 1975 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)」入善町教育委員会
- 橋本 正・上野 章・山本正敏・池野正男・松本幸治 1979 「富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 藤田富士夫 1974 「富山県立山町立山古窯跡群」『考古学ジャーナル97号』
- ヤ 柳井 聰・神保孝造 1975 「富山県立山町吉峰遺跡、第4次緊急発掘調査概報」 富山県教育委員会
- 山本正敏・岡上進一・松本幸治 1979 「魚津市佐伯遺跡」『富山県ほ場整備関連事業埋ほ場整備関連事業埋蔵文化財発掘調査概要』 富山県教育委員会

魚津市埋蔵文化財調査報告第7集

富山県魚津市

佐 伯 遺 跡

昭和56年2月28日印刷

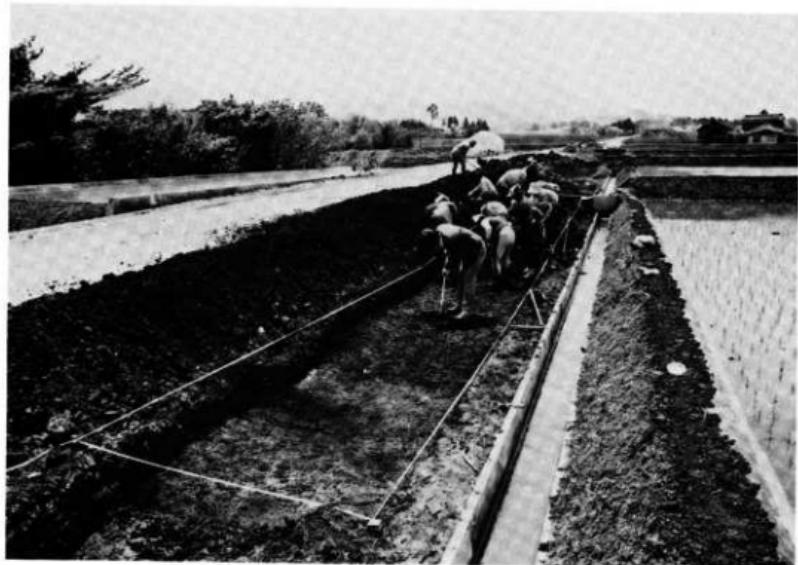
昭和56年3月21日発行

発行 魚津市教育委員会

〒937 魚津市駅前堂1-10-1

編集 麻柄・志

印刷 (有)日本海印刷



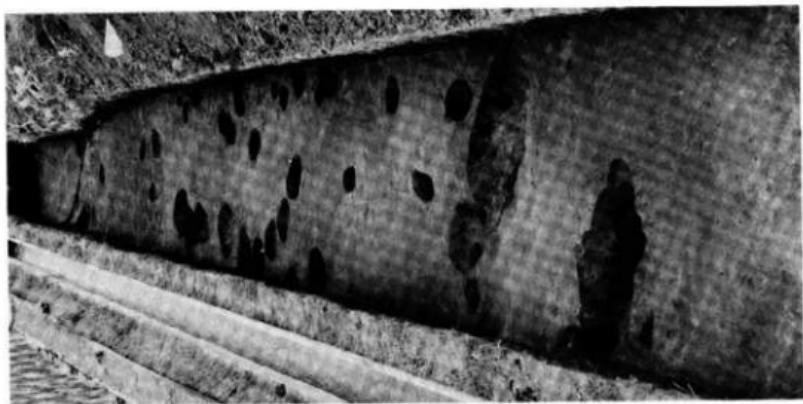
作業風景（表土除去）



作業風景（適耕整地）



炮眼全貌

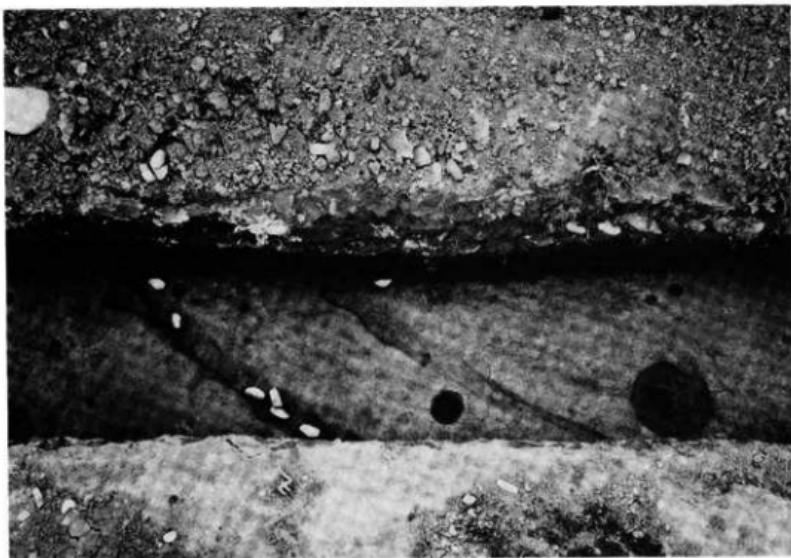




竪穴住居址（弥生時代終末～古墳時代初頭）全景、南より



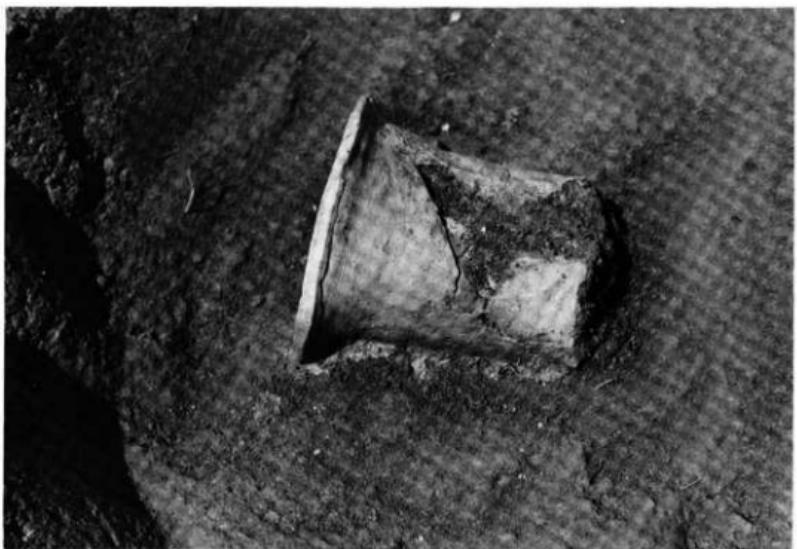
竪穴住居址全景 北より



竪穴住居址二重周溝



豊穴住居址外側周溝出土の高杯（第12図3）



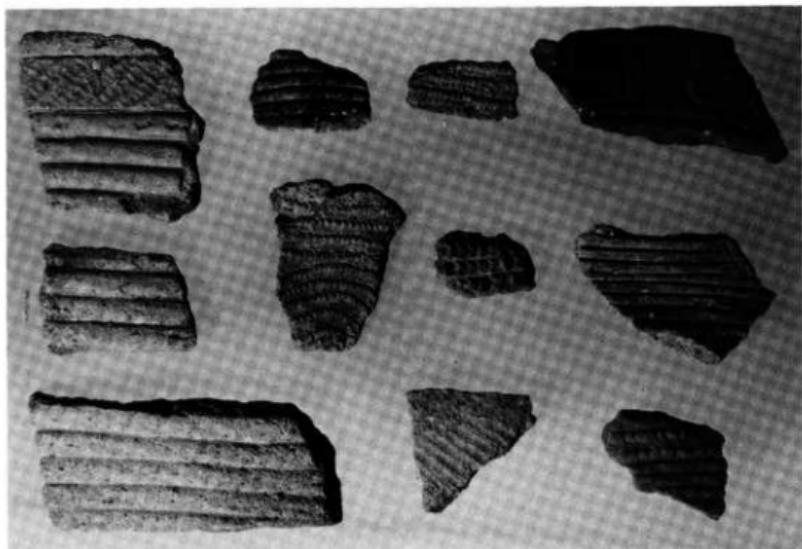
SK-05出土の長頸壺（第11図3）



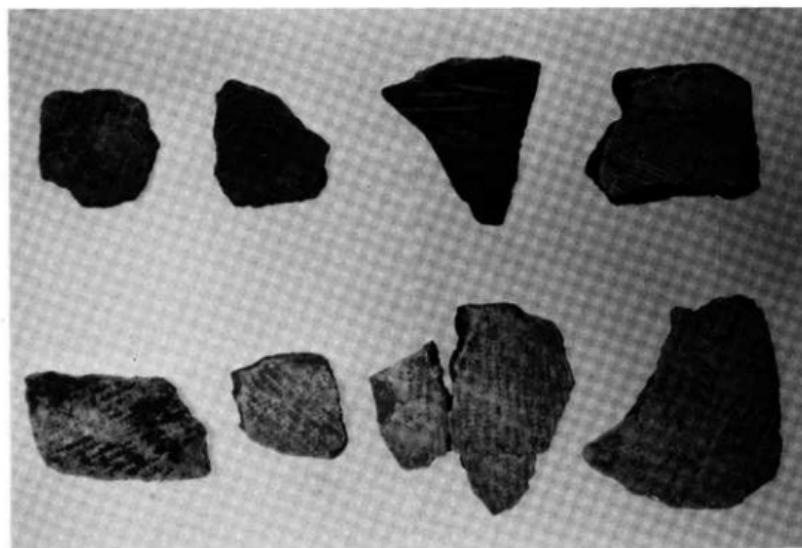
VI-5区出土の一括遺物（第14図）



柱穴群



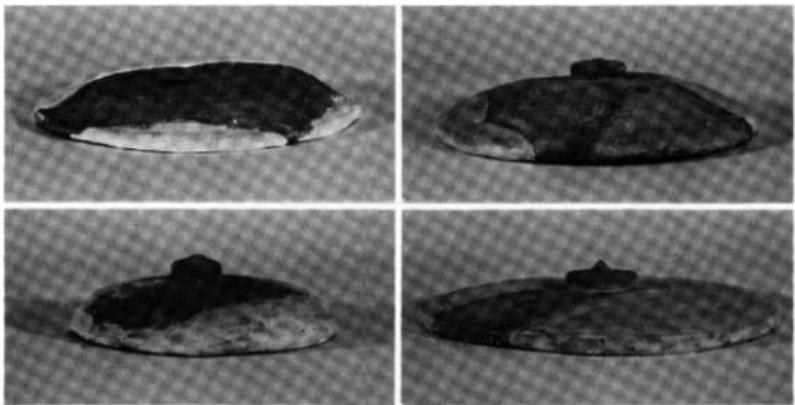
繩文土器



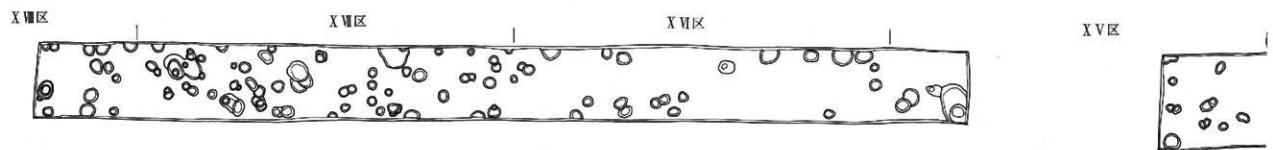
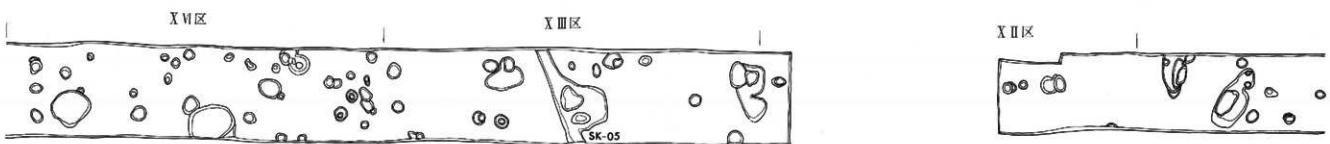
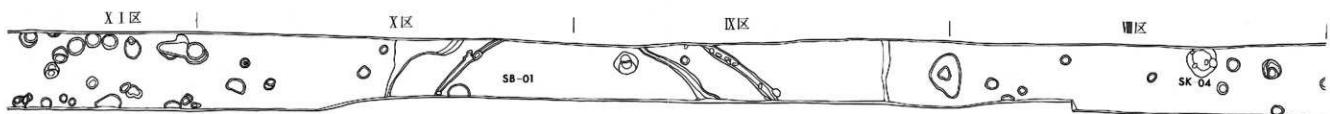
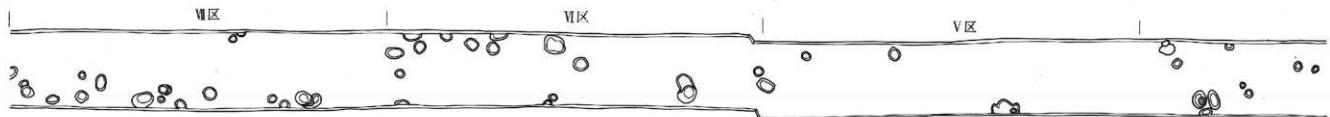
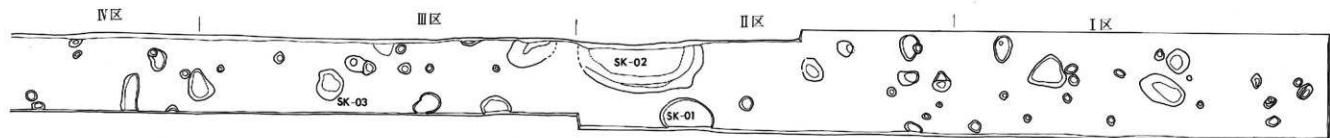
昂生土器



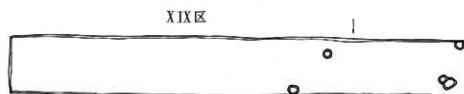
V-5 出土一括遺物



杯蓋（平安時代）



0 5 10m



Saeki Site

Uozu City, Toyama Pref.

1981

Board of Education of Uozu
Japan